

「津軽から見た世界史」の試み

Attempt of "World history learning that centered on Tsugaru"

篠塚 明彦*

Akihiko SHINOZUKA*

要旨

高等学校における「世界史未履修問題」を契機として、世界史教育に対して、歴史学の立場から様々な新しい世界史の理論が提起されている。しかし、これらの提起は学校現場での実践が難しく世界史教育の再生という問題への回答としては十分なものとはなっていない。そこで、地域からの世界史の視点をもとに、新しい世界史理論の提起も踏まえながら、現場での実践を意識した世界史学習のあり方を提起する。具体的には、津軽安藤氏の活躍に着目しながら、南の海域世界と北の海域世界との接点を探る世界史授業を提案し、併せて世界史教育再生の方向性を探っていく。

キーワード：世界史の再生、グローバル・ヒストリー、地域からの世界史、津軽安藤氏

1. はじめに

2006年秋、全国の高等学校で次々と、地理歴史科の必修科目であるはずの世界史が未履修となっていることが発覚した。いわゆる「世界史未履修問題」である。時間の経過とともにこの問題は人々の記憶から薄れつつあるように思える。しかしながら、その影響は現在も大きく残っている。この問題は、必修科目である世界史を事実上他の科目に置き換えるなどし、実際には高校現場で世界史が教えられていなかったのだが、学校が世界史を履修しないカリキュラムを編成し、高校生たちがそのカリキュラムを受け入れてきたことによって生じたものである。その背景には、生徒もそして教える教員の側にも世界史を学ぶことの意義が見いだせなかったという重大な問題が横たわっていた。そのため、この問題を契機に世界史を中心にして日本史も含めた歴史教育、ひいては地理歴史科教育全体のあり方や内容構成、学習方法についての議論が活発になされるようになった。そしてその議論は現段階においても続いており、その代表的なものが日本学術会議の提言とそれを巡る議論といえよう¹⁾。

ところで、「世界史未履修問題」は、教育現場と同様、あるいはそれ以上に、西洋史・東洋史などの外国史関係の研究者にも大きな衝撃を与えたようで、歴史学の側から、現場の世界史教育を意識した一般向けの

出版物も目立つようになった²⁾。代表的なものとして、たとえば、フランス経済史が専門の小田中直樹は、『世界史の教室から』（山川出版社、2007年）において、高校教員からの聞き取りやアンケートをもとに、世界史がどのように教えられているのか、またどのように教えらるべきかについて検討を加えている。また、東南アジア史を専門とする桃木至朗は、『わかる歴史面白い歴史役に立つ歴史』（大阪大学出版会、2009年）を、イスラーム史が専門の羽田正は、『新しい世界史へ』（岩波新書、2011年）をそれぞれ著している。桃木の著作のサブタイトルは「歴史学と歴教育の再生をめざして」とされており、その危機感と問題意識がうかがえる。桃木にしても、羽田にしても現在の歴史教育とくに世界史教育が魅力を失っている原因を、従来からの国民国家をベースとした一国史的な学習内容となっていることや、ヨーロッパ中心史観で教えられていることに見いだしている。グローバル化が進展しているといわれる今日においては、旧来の一国史のあるいはヨーロッパ中心の世界史の枠組みが陳腐なものとなり、高校生が学ぶべき内容とずれてきてしまっているというのである。また、桃木は、時代の変化に伴って歴史学の急速な発展や多様化がなされているものの、それに世界史教育の現場が追いついていないことも指摘している³⁾。

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Education, Faculty of Education, Hirosaki University.

このような今日的な状況への対応として、桃木や羽田が着目しているのがグローバル・ヒストリーの成果である⁴⁾。前述の桃木・羽田の著作はいずれも現状の問題点への対応として、グローバル・ヒストリーの手法に着目した学習内容の組み替えを提起している。

グローバル・ヒストリーについては、今年度より実施されている新学習指導要領（2009年版）にも、その影響が垣間見られる。世界史B「2 内容（3）諸地域世界の交流と再編」で、「ユーラシア海域及び内陸のネットワークを背景に、諸地域世界の交流が一段と活発化し、新たな地域世界の形成や再編を促したことを把握させる。」と述べ、「エ 空間軸から見る諸地域世界」を新設し、「同時代性に着目して主題を設定し、諸地域世界の接触や交流などを地図上に表したり、世紀ごとに比較するなどの活動を通して、世界史を空間的なつながりに着目して整理し、表現する技能を習得させる。」と述べている⁵⁾。また、現場の実践としては、田尻信壹がグローバル・ヒストリーの視点を取り入れた「単元『イブン＝バトゥータが旅した14世紀の世界』の開発—新学習指導要領世界史Aにおける『ユーラシアの交流圏』の教材化」を発表している⁶⁾。このように学校現場においてもグローバル・ヒストリーは少しずつ注目され始めている。

2. 桃木世界史・羽田世界史への疑問

桃木や羽田が指摘するように、現在の世界史教育は多くの問題を抱えており、「世界史未履修問題」に見られたような高校生の世界史忌避の傾向は解消されたわけではない。国民国家の枠組み自体が揺らいでいる中であって、従来型の一国史的な視点からの世界史が限界であるということは理解できる。その中でグローバル・ヒストリーの視点が有効であるだろうことも理解することができる。しかし、桃木や羽田の提起する世界史のあり方が果たして高校生の世界史忌避の傾向に歯止めをかけることになるのだろうか。また、実際に高校の教室で実践が可能なのであるかという疑問がわいてくる。確かに、時代状況にそぐわない学習内容では、高校生の興味をひくことはできないであろう。しかし、高校生が世界史離れをしている最大の要因は、「暗記主義」と「世界史が自分たちの生活とは全く関わりのないところに存在している」と考えていることにあるだろう。自分たちの生活世界の遙か外側に存在し、多くの暗記すべき事項や人名・年代が散りばめられている世界史に対して、高校生たちは興味を失い、魅力を見いだせず、学ぶべき意義を見いだせ

ないているのである。生徒にとっては、世界史は遠い外国の遙か昔のことであり、自分の今いる世界からは空間的にも時間的にも遠く隔たったところに存在していると捉えられているのである。これから未来に向かって生きていく高校生にとって、遠い世界の昔の話では自分たちの将来とは全く見当違いのベクトルになってしまうのである。そのような認識では、大学受験という要素以外には学ぶ必要性を感じられないであろう。そして、「大学受験のために」との意識で学ぶものには、受験が終わってしまえば世界史は不要な存在となってしまうのである。ちなみに、大学入試センターが公表しているデータによると、2013年度大学入試センター試験の世界史受験者（世界史A・Bの合計）は91,589人である。これは全受験者543,271人の約16.9%にすぎず、地理歴史科の中では世界史の受験者数が最も少なくなっている⁷⁾。仮に、受験という観点から世界史の必要性を考えたとしても、大学進学を目指す高校生の2割にも満たないものしか学ぶ意義を見いだせないことになってしまう。

『わかる歴史面白い歴史役に立つ歴史』の「第2部 東南アジア史の可能性」の中で、桃木は歴史学の研究成果を踏まえて、高校世界史における東南アジア史の学習内容を提起している。提起された中では、最低限教えるべき内容、そしてそれが「センター試験にもある程度は対応できる」ものとして示されていたり、「難関大学の論述問題」にも対応できるような内容として具体的な「課題」が示されている。『わかる歴史面白い歴史役に立つ歴史』を読んでいると桃木が受験を強く意識していることがうかがえる。また、授業のとらえ方についても違和感を覚える。どうも授業とは、学習内容について教師が深く理解し、それをわかりやすく生徒に教授するものとして位置づけているように思えてならない。教師が上位に位置してすべての答えを知っていて、下位に位置する生徒たちがその答えを求めていくという構造で授業が捉えられている。桃木の提起する世界史については、高校の現場で長く世界史教育に携わってきた井ノ口貴史が次のように述べている。「世界史の授業が受験のための授業に極端に傾斜しているとともに、新しい歴史学の成果を学ばない教師が古い知識のまま教えていると捉え、教室で教える知識を歴史学の側から修正するために、歴史教育者にリカレント教育の場を提供しようと試みている。大阪大学歴史教育研究会HPに掲載されている高校教師の報告を読む限り、教師と生徒の関係を「教え—教えられる」関係としか捉えていないのではない

か。そこでは常に教師が主体で、生徒は客体でしかない。授業は生徒と教師と教材によって成り立つはずであるが、構成主体の生徒が見えてこないのである。生徒が受験勉強とは次元の違う「学び」の要求を持っていることが想定されていないため、世界史の再生が図られるかははなはだ疑問である。⁸⁾

先に示したとおり、日本全国の高校生に中で、受験のために世界史を求めているものは、ほんの一握りに過ぎない。にもかかわらず、そのわずかな部分に焦点をあてて、世界史教育のあり方そのものを問うこと自体に大きな無理が生じているのである。

一方、羽田の提起はどうであろうか。羽田は「地球はひとつ」という視点に立って、「地球主義の考えに基づく地球市民のための世界史」の必要性を述べている⁹⁾。そしてそれを実現するためには、ヨーロッパ中心史観から脱却し、中心と周縁という二分法的な世界観を排除する。そして、「新しい世界史では、ヨーロッパ中心史観は言うまでもないが、それ以外の様々な中心史観から脱却することを目指さねばならない。」とし、中心・周縁の二項対立的構造を持つ現行世界史の基本的な見方の克服を訴えている¹⁰⁾。ヨーロッパ中心史観の克服はもっともなことである。また、その裏返しとしての中国中心史観などのアジア中心史観に陥ってはいけないということも肯ける。しかし、実際に世界史像を描こうとしたときに、すべての中心性を排除して描くことなど可能なのであろうか。どこかに視点、つまり羽田のいう中心を置かなくては描けないのではないだろうか。問題は、自分の見方を絶対視せず、多様な中心性を想定できることが重要なのではないだろうか。かつて江口朴郎が興味深いことを述べている。それは、江口がサライエヴォで出会った年若い案内人とのやりとりについてである。「ひととおりに見終わったとき、その案内人が、「どうです？プロフェッサー、ここは世界史の中心ではあるまいか」といった。現在の私だったら、「なるほど、私は日本が世界史の中心だと思っていたが、ここもそうだな」とでもいっただろう。しかしその頃はそれだけの才覚がなく、ただうなずくのみであったが、その言葉は深く私の心に刻みつけられた。」そして、ボスニアとセルビアをつなぐドリナの橋を舞台に生活してきた人々の400年にわたる物語を描いた『ドリナの橋』という文学作品について、「そこで生活していた人々の目にとらえられ、語られている世界史」とし、「サライエヴォでの年若い案内人との出会いは、私の内面を転換する機縁となった。私はそのなにげない問いかけか

ら歴史を自分の存在しているところから見ていくという姿勢を学ばされた」と述べている¹¹⁾。この江口の述べていることは、羽田の主張と実に対照的なものであると感じる。高校の世界史は、複数の中心性を持ち、他者のとらえる中心性をも尊重するこの江口の姿勢にこそ学ぶべきなのではないだろうか。

桃木の提起も、羽田の提起もいずれも歴史学の最新の研究成果・研究動向を反映させたものである。いずれも第一線で活躍する歴史学研究者としての真摯な姿勢がうかがわれる。しかし、実際に高校の現場で世界史の授業を行うとなると歴史学の成果をそのまま生徒に提供することはできない。世界史の授業では、歴史学の成果を活かして教材を作成し、その教材を通して生徒と教師がともに考えるような形でありたい。高校の世界史は、あくまでも地理歴史科の一科目としておかれているものであり、さらにいうならば「社会科」の中の世界史なのである¹²⁾。従って、世界史の授業で目指すべきところは、生徒一人一人が、自分自身が世界史の大きな流れの中に生きていることを感じ、自主的に世界史像を形成できるようにすることにあるのではないだろうか。確固たる世界史なるものが存在し、それを理解し、覚えていくことが世界史教育の目指すべきところではないはずである。

3. 地域からの視点を取り入れた世界史

江口の指摘するとおり、世界史は自分の存在しているところから見ていく必要があるだろう。それにより、遠い外国の昔のことだけでなく、世界史が自分自身と近いところにあるということを確認することができるのである。自分の存在しているところ、すなわち自分の日々の生活世界と世界史が結びついているとなれば、自分自身の存在と過去・現在、そして未来との結びつきも見えてくるのではないだろうか。それでこそ、世界史による受験を全く意識していない多くの高校生にとって、世界史を学ぶ意義が見えてくるのである。自身の生活世界とは関わりないところに世界史が存在していると意識されれば、誰もそれを学ぶ意義を見いだすことはできないであろう。ところが、自分の生活世界との接点が見えてくればその意識にも自ずと変化が現れるものである。高校生たちは誰も知的好奇心、「知りたい」という気持ちを持っている。そのような高校生の「知りたい」という気持ちに刺激を与えるような学習内容が用意されることが必要なのである。そしてまた同時に、何か確固たる「世界史」というものがありそれを覚えることが決して目的ではな

いということが意識されてこそ世界史の再生がなされるのであろう。自分の存在しているところからの世界史となれば、一人一人少しずつ異なった世界史像が描かれる可能性もある。そして、そのどれかが絶対的な正解とはならないわけである。

それでは、生活世界と結びついた世界史をどのように描いてゆけばよいのだろうか。それが、「地域からの世界史」である。江口が刺激を受けたサライェヴォの老人のことばや『ドリナの橋』に描かれた人々の姿に地域からの世界史を見て取ることができよう。近年、地域からの世界史が着目されつつあり、インターネット上に教員や研究者が参加するグループサイトが立ち上げられたり、地域からの世界史に関する著作も見かけられるようになってきている¹³⁾。

地域からの世界史に関連して、長野県の高校現場で世界史教育に携わってきた小川幸司が次のように述べている。やや長くなるが、大変に重要な指摘なので是非取り上げておきたい。「私の世界史は、他国史でもなければ、西洋史と東洋史の寄せ木細工でもない。私の世界史は一言で言えば、「歴史」である。「歴史」とは、自分を中心とする主体的な他者認識を、時系列を重視して築きあげたものの総体である。つまり、「自分の歴史」・「地域の歴史」・「日本列島の歴史」・「世界の歴史」が同心円状に「自己・他者認識」として形成されたものなのだ。この同心円は、自分から出発して近い歴史像から遠い歴史像に、順番に形成されていくというものではない。世界史像があるから、日本列島の歴史像が鮮明になってくるということが、いくらでもある。世界史像があるから、伊那谷の歴史の意味が見えてくるということも、いくらでもある。そして世界史像があるから、自分がいかに生きていくべきかを考え、自分自身が見えてくる。遠い歴史像があることで、近い歴史像や自己認識が、形作られるのである。同心円の「自己・他者認識」は、中心から外縁へ、そして外縁から中心へという双方向の「対話」によって、たえず刷新されていくものなのだと言えよう。」¹⁴⁾小川は、長野県の伊那谷から世界史を見ている。博多や神戸、横浜などの「国際都市」からではなく、ともすると世界との関わりが想定されにくい伊那谷からの世界史なのである。これは、日本のどこの地域であっても世界史が描き得ることを示しているといえよう。

4. 津軽安藤氏の活躍に着目した交流圏の授業

2009(平成21)年告示の『高等学校学習指導要領』世界史Bの項目には、「2 内容とその取扱い(3)

諸地域世界の交流と再編」に、「ユーラシア海域及び内陸のネットワークを背景に、諸地域世界の交流が一段と活発化し、新たな地域世界の形成や再編を促したことを把握させる。」とあり、「エ 空間軸から見る諸地域世界」として、「同時代性に着目して主題を設定し、諸地域世界の接触や交流などを地図上に表したり、世紀ごとに比較するなどの活動を通して、世界史を空間的なつながりに着目して整理し、表現する技能を習得させる。」とある¹⁵⁾。そして『学習指導要領解説』ではこれについて、「歴史的事象の空間的關係を把握し、その時代の世界の特質や諸地域世界相互の関わりを明らかにすることは、「(2) 諸地域世界の形成」のエで取り上げた技能と同様に、歴史学習の基本的技能の一つである。地理歴史科の目標として、「生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深める」ことが求められているので、このようなねらいを達成するためにも、空間的なつながりに着目した学習活動を取り入れることは大切である。また、この大項目は諸地域世界の交流が一段と活発化し地域世界の再編が促された時代を対象としており、空間的なつながりに着目した学習活動を行う上で多くの事例を見つることが可能である。」とのべている¹⁶⁾。

この点に注目しつつ、またグローバル・ヒストリーで取り上げられる海域世界や地域を越えた人々の活動をも意識して、青森県(津軽地方)に視点を据えた地域からの世界史の具体的な授業例を構想してみたい。なお、この授業例は、教科書の項目としては『世界史B』(実教出版)の第9章「2. 第2次大交易時代と海域アジア」(pp. 186~189)、『世界史B』(東京書籍)の第11章「3. 海と陸の結合—東南アジア世界の発展」(pp. 187~191)に位置づけられるものである。また、この授業を含めた前後の授業テーマは次に示すとおりである。

第1次…琉球王国の繁栄

第2次…キリンが中国にやってくる

—鄭和の南海大遠征—

第3次…象とラッコと日本海

—津軽安藤氏の活躍—(本時)

第4次…アジアの交易に参加するヨーロッパ人

授業では、まず15世紀前半に南海の交易圏が日本海の北陸地方にまで及んでいた可能性を確認したい。福井県小浜市のホームページには、「日本で初めてゾウが上陸したのが小浜です」との言葉が見られ、市役所の入口に飾られている「初めてゾウが来た港の図」と

いう絵が紹介されている¹⁷⁾。ゾウの話は、「若狭國稅所今富名領主代々次第」にある応永15（1406）年6月の記事をもとにしたものである。

応永15年6月22日南蕃船着岸、帝王の御名亜烈進卿、蕃使使臣問丸本阿弥、彼帝より日本の国王への進物等、生象一疋黒、山馬一隻、孔雀二対、鸚鵡二対、其外色々、彼船同11月18日大風の中湊浜へ打上られて破損の間、同16（1407）年に船新造、同10月1日出浜ありて渡唐了

なお、4年後（1410年）にも南蛮船が来港しており、これについては次のようにある。

同19年6月21日南蕃船二艘着岸これ有り、宿は問丸本阿弥、同8月29日当津出了、御所進物注文これ有り

『福井県史』によると、「応永19年小浜来航の南蛮船は、派遣地は未詳であるが、パレンバンの施進卿による派遣の可能性はあろう。室町初期約30年ほどの期間に、暹羅・爪哇（インドネシアのジャワ島）などより、華僑の頭目らの手により日本・朝鮮へ来航した船のあることが知られる。」¹⁸⁾という。なお、象などは將軍足利義持への献上品で、若狭から琵琶湖を経由して京都へ運ばれている。

この15世紀前半の時期に、東南アジア船の活動が日本海はかなり奥まで到達していたことがわかる。すなわち、東南アジアの交易圏の北端が、若狭湾の付近にまで及んでいたのである。この時期の東南アジアの交易の活性化は、鄭和の南海大遠征によってもたらされたものである。アンソニー＝リードは、「もし、東南アジアの「交易全盛時代」の始まりのそのときを選ぶとしたら、1405年の、宦官の將軍、鄭和の第1回遠征が最有力候補だろう。」¹⁹⁾と述べている。1405～33年にかけて、7回にわたって鄭和の南海大遠征が行われている。その目的は、東南アジアからインド洋世界にいたる国々に、明への朝貢を促すことにあった。この大遠征が大きな影響を及ぼして、東南アジアの交易を活性化させる。小浜への南蛮船（＝パレンバン船）の来航はその余波であり、南海の交易圏の北端は日本海はかなり奥にまで達していたと考えられる。

次いで授業では、この小浜と津軽との結びつきについて考えていきたい。

小浜には、名刹として知られる羽賀寺がある。小浜市のホームページでは、「山号鳳聚山。真言宗高野山派。…本堂は昭和41年9月に解体修理され、室町中期文安4年（1447）に再建された当時の偉容に接することが出来るようになった。」²⁰⁾と紹介されている。こ

れについて、『本浄山羽賀寺仮名縁起』に次のような記事が見られる。

又永享7年3月27日、火災あり、伽藍焼失して山林鳥有と成、唯本尊觀世音のみ残り給へり、応永5年の造営より僅に40年たらずして此難有るにより、国家憾て拳するに時なし、後花園院ふかく歎嘆ましまして、奥州十三の湊日の本將軍安倍の康季朝臣に勅して営功をなさしめ給ふ、康季朝臣も当寺の本尊奇瑞あれば、進て莫大の貨錢をを放捨したまひ、堂社ここに玉成せり、其功永享8年4月に初りて、文安4年に畢ぬ、同11月18日に本尊わたまし供養す²¹⁾

羽賀寺は、1435年に落雷により本堂が消失、翌36年から再建が行われ、1447年に完成した。これは、後花園院の勅を受け、津軽十三湊の安倍康季が莫大な財貨を投じて再建したのである。この安倍康季とは、津軽十三湊を拠点に勢力を誇った津軽安藤氏全盛期の当主安藤康季のことである。「なぜ安藤康季が再建を行ったのか？」生徒には羽賀寺本堂の再建が可能であった津軽安藤氏の財力と十三湊と小浜の結びつきに気づいてもらいたい。『福井県史』通史編2中世の序章では次のように述べられている。「嘉元4年（1306）に坂井郡崎浦に停泊した船は「関東御免津軽船二十艘の内随一」とされており、鎌倉期に鎌倉幕府の保護のもとで日本海を往返した津軽船の活動の一端が示されている。武田氏や遠敷郡羽賀寺が津軽安東氏と関係深かったことや、室町期小浜に十三丸という大船が入港していたこと、さらに『福井県史』（1920年）が指摘しているように、津軽の昆布を小浜で加工したものが狂言「昆布売」で知られる小浜の昆布であった。こうした小浜と津軽との関係は、日本海海運による恒常的な結びつきを前提として生まれたものであることはいうまでもない。」²²⁾

津軽安藤氏は小浜との密接な結びつきを持っているが故に羽賀寺本堂の再建を行ったのである。小浜は南海交易圏の北端である。ということは、小浜と津軽安藤氏の結びつきは、津軽安藤氏が南海の交易圏と接点を持っていたことにもなるのである。

ところが、津軽安藤氏が結びついていたのは、南海の交易圏だけではない。津軽よりもさらに北方の交易世界とも接点を持っていた。授業では、次にこの点について考えていきたい。

先の『本浄山羽賀寺仮名縁起』には、生徒にとってはおそらく気になるであろう言葉が見られる。それは、安倍康季に冠されている「日の本將軍」である。

「日の本」とは、現在の北海道太平洋岸あるいは北海道全域を指しており、「日の本將軍」とは「蝦夷征討將軍」を意味しており、蝦夷支配の最高責任者ということになる²³⁾。このことから津軽安藤氏が実際には現在の北海道をどの程度支配していたのかはともかくとしても、北海道方面との強い結びつきを持っていたことがうかがえる。

江戸幕府が編纂した『後鑑』巻136には、応永30(1423)年4月に安藤陸奥守が足利義量の將軍就任に際して贈った献上品について、「馬20匹、鳥5千羽、鷲眼2万匹、海虎皮30枚、昆布5百把到来了」²⁴⁾と記している。時代から考えて、この安藤陸奥守は、先にみた安藤康季かその父である安藤盛季と考えられている。また、鷲眼とは中国銭のことであり、海虎皮とはラッコの皮のことであり、昆布は現在の北海道からもたらされたもの、ラッコ皮はさらに北方からもたらされたものであろう。ラッコの生息地は、千島列島・カムチャツカ半島・アラスカなどの北方海域である。択捉島の北東に位置するウルップ島は別名「ラッコ島」と呼ばれている。明らかに津軽安藤氏は、日本列島北方の交易圏とも結びついていたことになる。大量の中国銭を献上している津軽安藤氏の豊かな財力の背景には北方海域との交易が関わっているのかもしれない。菊池俊彦は、サハリン・北海道オホーツク海沿岸・千島列島からカムチャツカ半島・オホーツク海北岸地域に、古くより環オホーツク海交易圏が存在していたことを明らかにしている²⁵⁾。津軽安藤氏が結びついていたのは、この環オホーツク海交易圏ということになるだろう。

津軽安藤氏は南方の交易圏と北方の交易圏の結節点で活動、「日本」という狭い枠組みを超えて「グローバル」に活動していたことになる。また、南シナ海・日本海・オホーツク海には、近代的な境界線(国境線)で区切られていない交流が成り立っていたことに生徒には気づいてもらいたい。

授業では、カムチャツカ半島までも含む東アジア・東南アジアの白地図を使用し、パレンバン、小浜、十三湊などの場所や南海交易圏の範囲、オホーツク海交易圏の範囲を書き込みながら進めたい。そして、各々の交易圏の広がりや複数の交易圏と結びついて活動していた津軽安藤氏の位置づけを確認しつつ、東アジア・東南アジアの中の津軽を意識してみたい。なお、この授業についての学習指導計画は後に示すとおりである。

5. 未来志向の世界史学習のために

本来、世界史というものには、覚えるべき確固たる世界史像があるわけではない。世界史像とは可変的なものであり、様々な視点、立ち位置から世界史を描くことは可能なはずである。それぞれの生徒が自身の立ち位置(それは、地理的な意味ばかりだけではなく)から世界史像を描き、自分の未来を見通していくことが重要なのである。自らの暮らす身近な地域が世界史の形成に主体的に関わる姿、世界史が遠い世界のことではなく自分たちの暮らす地域からも、独自の世界史像が描けること、自分の生活世界の外に世界史が存在しているのではなく、世界史の中に自分たちの生活世界が存在していると受け止められるようになると自ずと世界史学習の意義が認識されよう。

高校生たちには、津軽が世界史の中に位置付けていたということを通して、改めて現在の青森県や津軽を中心に日本や世界のことを考えてほしい。地域と日本そして世界、あるいは過去と現在との「対話」によって自分の未来を見据えてもらいたいものである。

実は、グローバル・ヒストリーからの指摘を待つまでもなく、現在の日本に暮らすものにとっては、一国的な発想からの転換が重要になっている。新自由主義的な改革の進行、それに伴う社会的格差の拡大と社会不安の増大。こうした状況の進行に伴って、「愛国心」・「ナショナリズム」が強く求められているのが、現在の日本社会である。「領土問題」が再燃していることもナショナリズムの高まりとは決して無関係ではないだろう。偏狭なナショナリズムに陥ることなく、周辺諸国との未来志向の友好関係を構築する必要性がある。そのためには、日本をアприオリなものにとらえず様々な空間的枠組みで捉え直す試みが重要となってくる。また、日本を取り巻く海域で起こっている「領土問題」とも関連して、海域が人々の活動を切り離す場ではなく、交流の場であったことを再認識する必要があるだろう。この点に関しても、津軽を中心にして海の交流に着目した世界史像を描く試みは有効であろう。

そもそも、日本列島を含む東アジア世界には明確な「国境」の概念が発達してはいなかった。「国境」あるいは「境界」という概念は、近代ヨーロッパにおいて主権国家体制が確立して以降に発達した概念である。19世紀以降ヨーロッパの主権国家が世界を席卷し、国民国家や国境の概念が各地に広まっていった。日本においても国境や自国の領域といったものを明確に意識したのは明治期である。明治期になり、従来曖昧なま

まにされていた周辺との境界を明確にしたのである。その結果、交流の場であった海域にも目には見えない線が引かれることになった。現在日本に暮らす私たちはこれを当たり前のものと捉えている。当然、中学生や高校生も同様な受け止め方をしている。現状のナショナリズムの氾濫は次世代を担う中学生や高校生に

良い影響を及ぼすとは思えない。一国史的な発想から抜け出すことのできない現状のような認識が続けば、偏狭なナショナリズムに裏打ちされた周辺諸国との緊張関係が平行線のまま継続されることにもなりかねない。そのようなにならないためにも世界史の再生は急務である。

〈資料〉「ゾウとラッコと日本海」学習指導計画

学習内容	学習活動	指導上の留意点	資料など
小浜への南蛮船の来港	15世紀初め頃、福井県小浜に南蛮船が来港。この南蛮船が東南アジアからの船であることを理解する。 東南アジアの交易圏の拡大を理解する。 交易圏拡大が鄭和の遠征の影響であることを知る。	絵をもとに「日本ではじめて〇〇が上陸したのが小浜です」にあてはまる言葉を考えさせる。また、資料を基に南蛮船の来港の事実を確認する。 資料を基に、小浜に来た船が偶然ではなく交易圏の拡大に関わっていることを気づかせる。 資料を基に、東南アジアの交易活発化の背景に鄭和の遠征があったことを気づかせる。	「初めてゾウが来た港の図」、 「若狭國税所今富名領主代々次第」 『福井県史』 A＝リード『大航海時代の東南アジアⅡー拡張と危機』
小浜と津軽安藤氏	小浜にある羽賀寺の本堂再建を安藤康季が行ったことを通じて、小浜と津軽が結びついていたことを理解する。 津軽安藤氏が南海の交易との接点を持ったことを理解する。	資料を読み、誰が羽賀寺の本堂を再建したか確認する。その上で、なぜ津軽の安藤氏なのか考えさせる。 資料で津軽と小浜の密接な関係を確認し、その結びつきは南蛮船が来港していたころにも続いていたことに気づかせる。	『本浄山羽賀寺仮名縁起』 『福井県史』
北方海域と津軽安藤氏	津軽安藤氏が現在の北海道と大きな関わりがあったことを理解する。	「日の本將軍」という称号に着目し、「日の本」の意味を推測させる。 「日の本將軍」が蝦夷支配の最高責任者的な存在であることを説明し、その称号を持つ津軽安藤氏が北海道にも深い関わりを持っていたことに気づかせる。	『本浄山羽賀寺仮名縁起』
	オホーツク世界の交易圏と津軽安藤氏が結びつきを持っていたことを理解する。	資料を基に、安藤陸奥守が將軍足利義量に贈った献上品を確認する。 献上品の内容を確認し、それらの産地を確認する。 海虎皮に着目させ、これが何かを推測させるとともに、このラッコの生息域を考えさせる。 その上で、ウルップ島が別名「ラッコ島」と呼ばれたことなどを説明し、ラッコ皮をオホーツク海域から入手していたことに気づかせる。 また、オホーツク海交易圏が存在していたことを説明する。	『後鑑』 ラッコの写真、ラッコの生息域を示した地図 オホーツク海交易圏を示した地図
南と北の交易世界を結ぶ津軽安藤氏	津軽安藤氏が、南の交易圏と北の交易圏との両方に結びついて活動していたことを理解する。そして、その活動は現在のような国境では区切られてはいなかったことを理解する。	白地図にパレンバン、小浜、十三湊、ウルップ島など授業で登場した地名を書き込ませる。また、南の交易圏と北の交易圏を書き込ませる。その上で津軽安藤氏の活動が及んだであろう範囲を記入し、津軽安藤氏が南北の交易圏の結節点にいたことに気づかせる。	東南アジアからカムチャツカ半島までを含む東アジアの白地図

注

- 1) 日本学術会議の心理学・教育学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同高校地理歴史科に関する分科会は、2011年8月「提言 新しい高校地理・歴史教育の創造ーグローバル化に対応した時空間認識の育成ー」を公表している。この提言は、冒頭の提言作成の背景として、「本提言は、平成18(2006)年秋に高等学校で表面化した「世界史未履修問題」の解決策を、グローバル化時代における「時間認識と空間認識のバランスのとれた教育」を重視する立場から検討したものである。」としている。この提言を受けて、歴史学関係諸団体を中心に議論が行われている。
- 2) 日本学術会議の提言がなされるに当たっても、外国史関係の研究者の受けた衝撃が反映されている可能性が考えられる。
- 3) 桃木は歴史学の変化に現場が追いついていけない原因を、日本の教育制度の制度疲労や保守性のほか、先進国中最低水準の教育予算や教育現場を疲弊させている管理主義・市場原理に求めている。桃木至朗『わかる歴史面白い歴史役に立つ歴史』(大阪大学出版会、2009年) pp. 21~24
- 4) グローバル・ヒストリーについては、以下の論者が参考となる。
水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』(山川出版社、2008年)、水島司『グローバル・ヒストリー入門』(山川出版社、2010年)、パミラ・カイル・クロスリー『グローバル・ヒストリーとは何か』(岩波書店、2012年)
- 5) 文部科学省『高等学校学習指導要領』(平成21年3月告示) p. 36
- 6) 日本社会科教育学会編『社会科教育研究』第91号(2004年) pp. 12~21
- 7) 2013年度の大学入試センター試験の日本史受験者数は163,297人、地理受験者数は145,529人であった。なお、センター試験全体の受験者数は、2009年度の507,621人から2012年度の543,271人へと増加傾向にある。それに伴って、日本史と地理の受験者数もそれぞれ増加傾向にある。それに対して、世界史の受験者数は、2009年度から2013年度までの5年間、ほぼ9万人から9万5千人の間で増減を繰り返しており横ばいである。
- 8) 歴史教育者協議会編『歴史地理教育』No.806(2013年7月号) p. 68
- 9) 羽田正『新しい世界史へ』(岩波新書、2011年) p. 92
- 10) 羽田前掲書 pp. 102~104
- 11) 江口朴郎『世界史の現段階と日本』(岩波書店、1986年) pp. 199~201
- 12) 周知の通り、高等学校の社会科は地理歴史科と公民科に解体されてしまった。しかし、実際に高校の現場での世界史は、日本史や地理そして現代社会、政治・経済、倫理等の科目との関連性無しには成り立たない。世界史は関連科目と相まって、いわゆる公民的資質の育成を目指すべきであり、社会科の理念を失ってはならないと考える。
- 13) 山口県の高校教師藤村泰夫が中心となって運営されているグループサイト「地域からの世界史プロジェクト」(<http://groups.google.com/group/tiiki-sekaishi>)や星乃治彦・池上大祐監修、福岡大学人文学部歴史学科西洋史ゼミ編著『地域が語る世界史』(法律文化社、2013年)などがある。
- 14) 小川幸司「地域と世界史をつなぐ」『信濃』第65巻第1号 p. 65
- 15) 文部科学省『高等学校学習指導要領』(2009年告示) p. 36
- 16) 文部科学省『高等学校学習指導要領 地理歴史編』(教育出版、2010年) p. 38
- 17) <http://www1.city.obama.fukui.jp/topic/?Page=9>
なお、小浜市役所に問い合わせたところ、絵については1960~70年代頃に有名な「南蛮図屏風」を真似て描かれたものだというのであった。そのため、不自然な部分が多く残念ながら歴史的な資料価値はない。
- 18) 『福井県史』通史編2 中世 第5章「中世後期の経済と都市」第2節「日本海海運と湊町」「5 外国船の来航と対外関係」(福井県文書館 デジタル歴史情報福井県史通史編) <http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/07/kenshi/tuushiindex.html>
- 19) アンソニー・リード『大航海時代の東南アジアⅡー拡張と危機』(法政大学出版局、2002年) p. 15
- 20) <http://www1.city.obama.fukui.jp/category/page.asp?Page=1223>
- 21) 『青森県史』資料編中世2 p. 304
- 22) 前掲『福井県史』通史編2 中世 序章
- 23) 長谷川・村越・小口・斉藤・小岩『青森県の歴史』(山川出版社、2000年) pp. 119~120
- 24) 『新訂増補版国史大系』第35巻 p. 697
- 25) 菊池俊彦『環オホーツク海古代文化の研究』(北海道大学図書刊行会、2004年)、菊池俊彦『オホーツクの古代史』(平凡社新書、2009年)

(2013. 8. 5 受理)